**一、文化十二年　侯臣要録**

（表紙）

「　文化十二乙亥歳

　候臣要録

　　正月吉辰　　　」

大　正丁亥　二丁巳　四丙辰　八癸丑　十壬子　十二辛亥

小　三丁亥　五丙戌　六乙卯　七甲申　九癸未　十一壬午

正月三邨　　二月竹邨　　三月稲葉

　　　　　　　　梅田　　　　入交

（朱書）「十一月十八日伊賀郡奉行被　仰付候」

四月杉立　　五月堀内　　六月海津

　　　　　　　　南　　　　　八田

　　　　　　　　　　　（朱書）「九月廿二日いが御右筆被　仰付候事」

七月恒川　　八月森川　　九月箕浦

　　喜多島　　　大平

十月深井　　十一月神尾　十二月藤九

　　石田

休息　水上　渡辺

　　相組廿人　与頭二人

　　〆廿二人

　　　正月　大月　番一色　触番三邨

一、丁亥元日

　御礼登　城采女殿御出席、岱治郎召連罷出ル、嘉例事無滞相済

　　　二日

一、御仏参相勤ル、直ニ礼ニ廻ル、拳初参ル、夕方例之通越知氏江唔初ニ参候事

　　　五日

一、高山様御仏参相勤候事

六日

一、岸氏鏡開、於鐺疱瘡ニ付御隠居様ヘ迄膳饋リ参ル事

　　　七日

一、孝譲院様御仏参相勤候事

　　　八日

一、曽我読初罷出ル、出席廿四人有之、尤例之通三種酒出ス、昼仕度祝帰リ候事、岱治郎茂出席

△柔場拳初、岱治郎召連出席

　　　十一日

一、御触三邨持廻り来ル、文言

殿様倍御機嫌能被遊御超歳、元朝御登　城、御家中御礼等段々相済恐悦之御事、右ニ付御悦今十一日登　城候様、此跡略ス

　　　　　　正月十一日　　　　　　　　　藤堂采女

右ニ付麻上下着登　城恐悦申上候、取次山内仙左衛門

△吉例之通鏡開キ、祝儀相済岸へ膳為持遣ス△十二日夕鉄炮タメ初、岱治郎召連罷出ル、毎之通三種ニ而酒出ル

　　　十五日

一、御山拝礼相勤ル、普請奉行渡辺高之助詰、真柄主殿組大塚吉太郎・林佳左衛門・小目附堀江潜蔵、昨日於鐺酒湯三番湯相済候事、△宇治山田江之　御代触三邨へ御隠居様御頼被成候ニ付此方江者不来候事

　　　廿六日

一、祐信院様御仏参相勤ル

　　　廿七日

一、普請奉行通達触一色氏より出ル、杉立より廻リ来ル、堀内へ相廻ス、奉公人触ナリ、文言略ス、廿五日附ナリ

　　　晦日

一、普請奉行通達触一色より出ル、杉立氏より廻ル、堀内へ相廻ス、東海道割増赤坂宿ナリ、文言略ス

　　　二月　大月　番桑名　触番竹邨・梅田

一、丁巳朔日式日御礼登　城、采女殿御出席、御牒前長島三左衛門、采女殿取次山内仙左衛門

△御触来ル、左之通、竹邨持廻り

江戸ゟ御飛脚到着之処

寿千代様御儀御丈夫ニ御成長被遊候付

御前様御養ひニ被成、直ニ

御嫡子ニ被成候段先月　公辺江御届、御都合好被為済候段申来、恐悦之御事ニ候、依之向後

若殿様と可奉称候

　　一、右御嫡子之御届被為済候付

　　　両殿様へ為御悦明後三日麻上下着独礼已上登　城可有之候、小役人者支配頭へ可罷出候、此跡略ス

　　　　　　二月朔日　　　　　　　　　　藤堂采女

　　　三日

一、麻上下着恐悦登　城御悦申上ル取次山内仙左

　　　　　　　　　　　　　　　　衛門申述ル

△通達触来ル

　　　寿千代様御成長御丈夫ニ被為成候付、

　　　　　　　　　　　　　　　　　入

　　　御前様御養ひ御嫡子之御届被　仰候ニ付、爾来　若殿様と奉称候様被　仰出候旨、此跡略ス

　　　　　　二月朔日　　　山嵜半右衛門　渡辺高之助

　　　十二日

一、御触来ル、左之通、竹邨持廻リ

　　　江戸ゟ御飛脚到着之処

　　　飛騨守様之御隠居　永井日向守様御病気之処、御養生不被為叶去ル二日御逝去被成候旨申来候、依之

　　　　　鳴物音曲　去ル二日ゟ廿一日迄　停止

　　　　　　　　　　廿日之内

　　　　　普請作事　去ル二日ゟ昨　　　　停止

　　　　　　　　　　十一日迄十日之内

　　　右之通相慎候様被　仰出候

　　一、殿様へ為窺　御機嫌鑓奉行已上諸役人明十三日麻上下着登　城可有之候

　　一、若殿様江為窺　御機嫌独礼已上右同断登　城可有之候、小役人者支配頭へ可罷出候

　　　右之趣組之侍中へも可被示達候、已上

　　　　　　二月十二日　　　　　　　　　藤堂采女

　　　十三日

一、麻上下着為伺　御機嫌登　城仕候事

△白井弥三七五拾石御足高津附勘定頭被　仰付候由△今朝　御城帳前近藤七郎右衛門江申演ル

　　　十六日

　　　　　　　　　先々

一、御触来ル、竹邨持廻り堀内へ廻ス杉立ゟ

　　　　　　　　　〃　　　　　　　来ル

　　　宗旨奉行ゟ采女殿へ之触ナリ、文言略ス

　　　　　　二月十五日　　渡辺高之助　山嵜半右衛門

　　　　　　　藤　采女様

△采女殿ゟ与頭宛ニ而御添触在之、文言略

　　　同日　一色新助殿　桑名又右衛門殿　　藤堂采女

　　　十六日

一、今日ゟ梅田触番之事

△相組名前左之通

　　　　与頭　　　　　　同三百石　　　　六百石

　四百石　一色新助　　　　桑名又右衛門　　箕浦藤兵衛

　　　　　　　　　　　　目附下五百石　　上五百石

　六百石　藤堂九八郎　　　神尾六郎右衛門　水上権太夫

　　　（朱書）「郡奉行」 三百五拾石　　　二百八十石

　五百石　杉立石蔵　　　　三邨郷右衛門　　恒川平内

　　　　　　　　　　　　目附二百五拾石　同

　二百六　竹邨重左衛門　　海津伝右衛門　　森川善左衛門

　拾石

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　二百石

　二百五　堀内権十郎　同　大平重次郎　　喜多島源右衛門

　拾石　　　　　　　　　　　　　　　　　深井才兵衛

　　勘定役被　仰付候事　　御右筆　　　　百七拾石

　二百石　南源之丞　　同　八田三郎左衛門　渡辺定之丞

　百五拾石　　　　　　　同　　　　　　　同

　　　　　梅田茂左衛門　　石田惣之助　　　入交貞治郎

　　在江戸喜多島次

　二百石 深井才兵衛

　　　十七日

一、門長屋柏野邨平助と申者へ貸遣候事、尤此間小目附中邨恵左衛門へ申述承知之旨与頭桑名ニ茂致噂回達候事、平助今晩ゟ引越候事

　　　廿日

　　　　　　　　　先々

一、御触来ル、梅田持廻シ、杉立ゟ来ル、堀内へ廻ス

　　　　　　　　　〃

　　　有章院様百回御忌御取越ニ付於

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　増上寺

御法事有之候間、来ル廿六日ゟ同晦日迄物静ニ可致旨被　仰出候、普請作事者構無之候、右之趣組之侍中へも可被示達候、已上

　　　　　　二月十八日　　　　　　　　　藤堂采女

　　　廿三日

一、御触来ル、梅田先々廻リ、杉立ゟ来リ、堀内へ廻ス、普請奉行役儀之固ナリ、文言略ス

　　　　二月廿二日　　　　　　　　　　　藤堂采女

　　　廿四日

一、御征月御仏参相勤ル　　　宗玄院様也

△去ル廿二日より長屋江平介引取候事

△役銀触来ル、点掛戻ス、渡辺高之助・山崎半右衛門

　　　廿五日

一、水沼先生今日御越被成候事

△二日より毎日稽古在之事

　　　三月　小月　番一色　触番稲葉・入交

一、丁亥朔日月次御礼御用赦

　　　三日

一、上巳御礼登　城、采女殿御出席

△南源之丞格式引下リ勘定役被　仰付候旨為知廻帖与頭より来ル

　　　七日

一、与頭中ゟ手紙相御触来ル、文言左之通

　　　公儀御誕生之　姫君様去月廿八日御逝去被成候、依

　　　之

　　　　鳴物音曲一昨五日ゟ今七停止　普請作事無御構

　　　　　　　　日迄三日之内

　　　右之通相慎候様被　仰出候旨、此跡略ス

△右御触持廻リニ出し候様申来即刻相廻ス、月番与頭江為見参り直に采女殿江持参御戻し申上候事

　　　八日

一、宗旨判形明後十日五ツ時過相調候様御触来ル、与頭中添翰病気差合候者ハ明夕迄ニ新介方へ申入、尤御玄関江茂断申遣候様、文言略ス、右持廻りニ出ス事

　　　　三月八日

　　　十日

一、五時過登　城、宗判無滞相済、毎之通采女殿御逢御挨拶在之、与頭御返答申退出之事

△水沼先生先月廿五日ゟ御出、明日御帰津之筈、御逗留中曲尺戦法登　殿、栃尾八郎左衛門楓井庄右衛門御伝来在之、二之丸義五郎殿茂入門誓約相済候事

　　　十三日

一、鉄炮御一覧相済候事、岱治郎も出ル、鎗御一覧茂相済祥ノ助も出勤

　　　十四日

一、柔御一覧相済、兵治とも三人とも相勤候事

　　　十五日

一、今日限ニ而触番相済せ候事

△入交貞治郎相勤候事

　　　十九日

一、中邨半兵衛今日御右筆被

仰付候、尤為知茂在之歓ニ参候事

　　　廿四日

一、用事ニ付明廿五日ゟ参津仕度相窺候処、何之思食も無之

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　逗

勝手ニ参候様御指図ニ付、直ニ御案内申石崎覚蔵方ニ留仕候様申込、取次樋口喜大夫

　　　廿五日

一、参津、御月番内匠殿江御案内申上ル

　　　廿八日

一、明日伊州へ罷帰候旨差出持参取次へ相渡ス、唯今登　城後刻可申聞旨、宜様御頼申候旨申候而引取候事

△差出文言左之通

　　　差出

　　一、　　　　　　　　　　　　　　　　　　　私儀

　　　用事御坐候ニ付去ル廿五日爰元へ罷越

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　石崎覚蔵方ニ

　　　逗留仕、明廿九日伊州へ罷帰申候、右御案内申上候、已上

　　　　　　　　　　　　　　　　采女組

　　　　　亥　　　　　　　　　　　　　稲葉小左衛門

　　　　　　三月廿八日　　　　　　　　　　　　　書判

　　　　　　藤堂内匠殿

　　　廿九日

一、八ツ半頃罷帰七時過差出ヲ以采女殿へ御案内申上ル、与頭茂案内ニ参候事

△廿七日采女殿ゟ御触来候由、文言左之通

　　　組附侍中武具馬具此度不時改被

　　　仰出候間、組侍中武具馬具明後廿九日銘々宅へ家来差遣し毛附帳面引合相改可申候

　　　　　但、御武具蔵江奉預候分并幼少之面々ハ不及改、武具馬具之内所持之品在之分ハ其品迄改可申候

　　一、病気ニ而自分難出会面々忰又者一類之内にて出会候而改を請候様可被致候、右之趣組侍中江可被示達候、已上　三月廿七日　藤堂采女

△与頭へ書附差出候様申来ニ付留守ニ付御隠居様御認被下御差出被下候事、左之通

　　　　　手覚

　　一、障泥　　青漆板　　　一、障泥紐　紺

　　一、力革　　黒縁金　　　一、切付　　惣金二枚

　　一、押掛　　黒村山　　　一、立聞　　紫糸

　　一、轡　　　十文字　　　一、手綱　　布萌黄

　　〆

右之通廿九日ニ来リ岱治郎御隠居様御召連相済候事、衛藤善兵衛外壱人参候旨

△廿七日通達触来ル、左之通

　　　　　覚

　　一、公儀御役所向堂上方寺社方并町郷中ニ而茂総而名目在之候金子借用之儀ハ先年被　仰出候通弥御制禁ニ候条堅相守可被申候、若心得違之儀在之候者急度可被及御沙汰候

　　一、御地領ニ而茂町人百姓所持之金子借用之儀御差構無

　　　　　　　　　　　　　　　元利返弁之儀

之候間以後届ニ不及候、乍併令遅滞不埒之取計ひ有之候趣相聞候ハヽ厳可被　仰付事

　但、御賄之面々臨時入用之節何事ニよらす拝借被　仰付候事故、他所金借用いたし候義一切御制禁之事

　　〆

去ル未年四ケ条御救筋之儀被　仰出候節他所へ出役之面々ハ名目金之外無拠筋ニ而致借用候ハヽ、其訳相届候様被　仰出

　　　　　　　　　　も

候所心得違居候面々在之、且平日金当分之借用等差支候趣ニ茂相聞候ニ付、尚又此度改被

仰出候間、御家中之面々へ各ゟ通達可在之事

　〆

　　　四月　大　月番桑名　触番杉立

一、丙辰朔日月次御礼登　城、采女殿御出座、御礼申上候、御帳前長島三左衛門、采女殿取次近藤七郎右衛門

　　　　　廻り

一、四日持触来ル

　　　権現様弐百回御神忌ニ付来ル七日ゟ十七日迄鳴物音曲普請殺生事停止、普請作事構無之、此跡略ス

　　　　　　四月四日

一、七孝譲院様御征月相勤ル

一、十一日大輪院様御征月相勤ル

△御触来ル、石蔵触番先々廻り堀内へ廻ス、左之通

　　　若殿様御嫡子御届被為済候付

両殿様へ爰許御家中侍中ゟ被差上候御祝儀物先月廿八日一統目録を以披露在之候処、

御機嫌之御事ニ候旨申来候条可被得其意候、右之趣組々侍中へ茂可被示達候、已上

　　　　　　四月十一日　　　　　　　　　藤堂采女

△御触同断左之通

　　　御上国前ニ付諸願其外被示聞候義在之候者来ル廿二日迄ニ可被示聞候、此跡略ス

△与頭より諸廻帖ニ而諸事其外之儀在之候者来ル十八日迄ニ月番へ申出候様申来ル

一、十八日勘定所ゟ与頭へ廻帖

　　　若殿様御嫡子御届被為済候付、為御祝儀御家中ゟ差上

　　　物覚

　　　殿様

　　　若殿様相兼

　　　　　鰹節　　三百

　　　　　大樽　　弐　　　　伊賀附侍中

　　　　右之割

　　　百石ニ付　弐分百石以下右之割、但六拾目割、此跡略ス、来ル廿二日廿三日両日之内掛屋方へ相渡候様　四月十七日

△与頭ゟ廻帖文言略ス　四月十八日

一、廿一日御触来ル、先々廻し堀内へ廻ス、触番石蔵

　　　江戸ゟ御飛脚到着之処

　　　殿様倍御機嫌克被遊御坐、去ル十三日為

　　　上使

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　青山下野守様

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御出

　　　上意之趣被仰渡御国許江之御暇首尾好被

　　　仰出、不相替白銀三十枚紗綾三十巻御拝領被遊、難有御大慶　思候、依之当月廿七日　御発駕、道中十日歴、来月七日　御上着被遊候筈ニ候、此旨御家中侍共へも可申聞旨　御意之旨申来之、恐悦之御事ニ候、右ニ付為御悦登　城之儀者御暇之御程被　仰上候上相兼可申上候、此跡略ス　四月廿一日　藤堂采女

一、廿三日御祝儀物代四分四厘今日相収候事

一、廿五日御触来ル、石蔵持廻り、文言左之通

　　　江戸ゟ御飛脚到着候処

　　　殿様　若殿様倍御機嫌克被成御坐候、今般

　　　殿様御国許江之御暇被蒙為

　　　仰候付、去ル十四日従

　　　大納言様為　上使

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　松平能登守様

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　御出

　　　紗綾十巻御拝領被遊不相替結構如斯首尾難有御大慶

　　　思召候、将又同日御老中御連名之御奉書を以明十五日朝五半時御登

　　　城御暇之御礼被　仰上候様ニと申来、則去ル十五日御登

　　　城被遊候処、首尾好御礼被　仰上

　　　上意茂有之、御馬御拝領被成難有御大慶　思召候、此如御家中侍共へも申聞候様ニと　御意候ニ付申来候、恐悦之御事ニ候、依之先達而相触候通

　　　両殿様へ両様之為御悦明後廿七日

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　独礼已上

　　　登　城可在之候、小役人者支配頭へ、此跡略ス

　　　　　　四月廿五日　　　　　　　　　藤堂采女

一、廿六日与頭より廻帖左之通

　　　以廻帖得御意候、然ハ采女殿御儀来月五日ゟ御参津被成候段為御知被下候付、右之段為御知得御意度如是御坐候、此跡略ス

一、廿七日目録流三ノ目々録相済候事、右ニ付打田へ祝儀七匁遣ス、津喜太夫孫兵衛江礼銭出ス

一、晦日采女殿へ御見廻ニ参上

　　　五月　小月　番一色　触番堀内

一、丙戌朔日端午ニ付御礼御用捨

一、三日御触、文言左之通

　　　殿様倍御機嫌克好、去月廿七日御発駕被遊候段恐悦之御事ニ候、右ニ付為御歓登

　　　城不及旨、此跡略ス

　　　　　　五月三日　　　　　　　　　　藤堂采女

一、端午御礼登　城、采女殿御留守、御帳ニ而申上ル

一、七日采女殿御留守見舞ニ参上

一、八日天赦日

一、九日触来ル、堀内持廻り、左之通

　　　見附駅ゟ之御飛脚到着之処

　　　殿様倍御機嫌能被成御旅行、兼而者当月朔日大井川御越可被遊之処、御川支ニ而御逗留被為在、同五日大井川御越被遊、末々迄何之滞儀茂も無之、同晩見附駅ニ　御止宿被遊候、御逗留茂被為在候得共倍御機嫌能被成御坐候段申来之、恐悦之御事ニ候、右ニ付御帖者不及申上候、依之御日歴四日相延明後十日　御上着被遊候筈ニ候、右之趣、此跡略ス　五月八日　藤堂采女

△当月より九日朝より十日暮六迄酒・焼酒とも相慎、尤悦振舞ニ参とて茂大酒不仕候様、病気本復仕候様ニと

金毘羅権現へ御願申上候事、尤朝酒・ひや酒可相成たけ相慎可申候事

一、廿日采女殿御留守見舞ニ参上、二度目

一、廿二日与頭より廻帖来ル、采女殿来ル廿三日御暇被下廿四日爰元江御帰り被成候段老共ゟ為知参候旨為知在之、文言略ス　五月廿日

一、廿九日祥之助仮養子ニ遣し在之取戻候ニ付、明日御差遣被下候様桑名江持参相頼、文言左之通

　　　　　　覚

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　私

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　次男

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　稲葉祥之助

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　岸　作左衛門

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　十二月十四日死去

　　　江戸詰中仮養子ニ遣し在之候処、此度死登候ニ付取戻し申候、右御案内可然様奉頼候事

　　　　　亥六月　　　　　　　　　　稲葉小左衛門

　　　六月　小月　番桑名　触番海津・八田

一、乙卯朔日五半時登　城御礼申上ル、采女殿御出席、右時刻延引者蝕ニ付五半時登　城候様一昨日通達在之候事、御帳前重福彦内、采女殿帳前へ礼申述ル

△於　御城桑名被申聞候者、御差出被成候御書付今日差出候処、采女殿御落手御承知被成候旨、演説前ニ御礼申述ルニ不及事

△与頭中ゟ廻帖ニ而御武具蔵ニ御預ケ申在之候武具馬具来ル

　　　　　　　　出

十四日迄ニ迄ニ遣し候様、三八四九昼迄之内ニと武具奉行

　　　　　　　〃

中ゟ申来候旨、文言略

　　六月朔日　一色　桑名　堀内へ廻ス

一、二日　到岸院様御征月相勤ル

△普請方通達触来ル、左之通、添触者新七郎殿初給知取之面々迄連名

　　　御家中給知在之面々、古来より御定之通村役人進退者勿論、百姓之上ニ而も御政事ニ相拘り候義一切差構申間敷候、右者先年被　仰出茂在之候得共、年久敷事ゆへ猶又右之趣給知在之面々不洩様各ゟ通達可有之事

　　　　　〆六月朔日

一、十四日御触来ル、略文言、左之通、触番海津、恒川へ廻ス

　　　去戌四月廿八日夜上州勢多郡下大島邨百姓麻右衛門儀女房小よ并幼年之忰召連、同国より京都へ罷越、御関所を山越いたし候者、此跡略ス

△午之三刻土用入

一、十五日与頭中ゟ廻帖ニ而来ル廿日朝飯後印判持参桑名へ参候様申来、文言略ス

一、十九日采女殿江土用中見舞ニ参ル、取次山内仙左衛門

一、廿日五半頃桑名氏江参り御尋者之差出候調印一色見届桑名不快ニ付闕座

　　　七月　小月　番一色　触番恒川・喜多島

一、甲申朔日月次御礼、七夕御礼有之ニ付御用赦

一、六日　本寂院様御征月参拝

一、七夕御礼登　城、采女殿御出座、御帳前西山宗左衛門、采女殿取次近藤一郎右衛門

一、八日与頭中ゟ廻帖ニ而御勘定所ゟ御貸時米先格ニ御貸渡在之旨申来ル、文言略ス

　　　　　　　　　　　　（踊カ）

一、九日御触来ル、御施餓鬼桶り触弐通ニシテ、文言略ス、先々廻し大平ゟ来り、堀内へ廻ス、触番恒川

一、十三日与頭より廻帖来ル、左之通、堀内へ廻ス

　　　─然者私共へ普請方ゟ達之儀御坐候ニ付、其段御達申候ニ付、明十四日朝飯後新介方へ御出可被成候、此跡略ス

　　　　　　七月十三日

一、十四日右ニ付新助宅へ罷出候処、此度御武具蔵惣囲之内御宝蔵へとふそく在之、銀子ぬすみ取候、依之銘々召仕之男女等心懸り茂無之哉、且其余ニ茂心掛り之筋無之哉尋ニ付、今以何之心掛り之筋無御坐段申演候事△当月五日夜銀札蔵之内ニ入銀六貫目銀札六貫目程ヌスミ取候由、御蔵囲之塀江堀内権十郎所持之階子ヲ掛ヤネヲ切抜キハヒリ候由、依之堀内ハ心慎いたし居申候事

一、十五日長田　御山　御廟拝相勤ル、詰番山崎半右衛門・式部殿組和田彦三郎・高木清八・小目附加役服部弥五八直ニ御寺拝礼相勤候事

一、十六日御寺参拝相勤候事

一、十七日諸役人中江九月中旬爰元へ御越国可被遊、御往来共長野越と被仰出候由承之、尤御内意

一、廿日御触来ル、左之通、先々廻し

　　　安永五申年四月十五日以来当亥年十二月迄之処、御家中之面々由緒書相改可差出旨被　仰出候条、当年中ニ相調へ候而右帳面十二月廿九日之日附ニいたし書判被相認、来正月廿五日迄ニ可被差出候

　　　　但、美濃紙帳ニいたし張縅不及候

一、支配かい有之面々者頭々へ取集可被差出候

　　　但、独礼已上者拙者宛所、右以下小役人者頭々宛所ニ

　　　　　　　　　　　　　引下り勤

可被致候、小役人之内独礼之者茂頭之宛所ニ有之候、右之趣組之侍中江茂可被示達候、以上

　　　　　　七月十八日　　　　　　　　　藤堂采女

一、廿三日御触来ル、喜多島持廻り

　　　殿様倍御機嫌好被成御坐、九月中旬頃爰元江　御越国可被遊旨被　仰出候間、可得其意候

一、右ニ付　組附侍中并支配之面々迄も列之次第例之通書付可被差出候

一、従先年　御目見へ致し来り候独礼已上嫡子名列之次第書付可被差出候

一、是迄　御目見致し来候次男以下并隠居江戸方小役人之嫡子ハ御取締中　御目見無之候

一、初而　御目見願之子共是迄之通名年書付可被示聞候、尤次男以下弟孫ニ而も是迄武芸計ニ罷出　御目見無之面々并学文出情入　御覧候子共茂初而　御目見願相成候

一、家督跡目養子遣り方之者御取締中御礼御用捨之事、次男嫡子嫡孫承祖被　召出、新知御家増御用人以上役附侍組并足軽組御預右之通御礼未相済分、其品年月等委ク書付可被差出候、尤組合限差出取集来月朔日迄ニ月番ゟ一所ニ可被差出候

一、諸願之義在之候ハ、来月十日迄ニ可被申聞候、右之趣─　七月廿三日

　　△与頭添簡

　　　御触之趣ニ付初而　御目見御願書并御差出入候分ハ、来ル廿六日夕迄ニ可申候

　　一、御願事其外被仰入候義御坐候者来月七日迄ニ可被仰聞候、已上

一、廿六日願書一色江持参、左之通

　　　　　　奉願口上之覚

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　私

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　次男

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　稲葉祥之助

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　当亥十二歳

　　　先年武芸

　　　御覧相勤候ニ付、当秋

　　　御越国之節初而

　　　御目見為仕度奉願上候、不苦思召候ハヽ何分可然様御執成奉頼上候、以上

　　　　亥　　　　　　　　　　　　　稲葉小左衛門

　　　　　七月廿七日　　　　　　　　　　　　　書判

△右之通相認罷出候処、何之存念も無之、明日差出可申候旨

△御召帖来ル、左之通

　　　御用之儀有之候間、明廿七日四時各登　城可有之候、以上

　　　　　　七月廿六日　　　　　　　　　藤堂采女

　　　猶々早々順達可有之候、以上

　　一色新介殿　　　　杉立石蔵殿　　　三邨郷右衛門殿

　　竹邨金右衛門殿　　梅津伝右衛門殿　稲葉小左衛門殿

　　喜多島源右衛門殿　梅田茂左衛門殿　此跡名前略ス

　　　　　　　御番頭

奉点掛廻ス、与頭へも案内ニ参ル

一、廿七日五半時登　城

杉立石蔵　　　　竹邨金右衛門　　稲葉小左衛門

　　　　　　　名前計り

喜多島源右衛門　八田三郎左衛門　友田左金吾

　　　　　　　　　　　　　　　板崎喜兵衛

小川助六　　　　須知八郎右衛門　出口一郎右衛門

富士林倉太　　　白井堅五郎　　　和田彦三郎

　　名前計り

中川喜兵衛　　　佐久間九郎右衛門　橋本至郎

　右一列ニ罷出ル、御書附左之通

　　　　　　　　　　　　　　　　　詰番

　　　右之者共　御越国中大小姓加り被　仰付候

　御請石蔵申上ル、直ニ采女殿御口達、各平松御休へ御迎ニ罷出候様被　仰出候旨、右御請同人申上ル、外取次広間詰被　仰付有之、名前略ス

△御玄関ニ而御礼申述、与頭へも案内ニ参ル、八田・中川忌中ニ付石蔵達ニ参候事

△一統石蔵方へ参り津定役爰元郡奉行へ手紙遣ス、左之通

　　　以手紙得御意候、私共　御越国中大小姓加り被　仰付ニ付相止可然歟

　　　　　爾来ハ此所へ御着と認可然歟

候ニ付、前日より平松へ罷越候、旅宿之儀別紙之通乍

　　　　依之可然か

御世話御申付可被下候、以上　　七月廿七日

　　　山中新五右衛門様　山内五郎大夫様　杉立石蔵

　　　猶々翌月平松平田両宿昼支度用意いたし候御申付可被下候、上十六人下十六人右之通ニ御坐候、已上

　　　一筆啓上仕候、此節弥御安全可被成御勤珍重御義奉存

候、然者私共爰元御越国之節大小姓加り詰番被　仰付難有仕合奉存候、宜様奉頼候、御案内旁如此御坐候、恐惶謹言

　　　七月廿七日　　　十六人連判八田中川忌中ニ

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　付除判名前計

　　前野平右衛門様　山岡少三郎様　岡部勘七様　梅林

　　参語兵衛様　津邨忠吾様

　　上封

　　　前野津村様　　杉立富士林

　右書帖郡方津帖とも石蔵ゟ遣ス

　　二十九日

一、晦日御触、喜多島持廻り、左之通

　　　乗之助様御子　砂姫様御儀　主殿様御養女ニ被成　若殿様江御縁組被成度、先達而御願書被差出候処、当月廿一日御願之通被為蒙仰候段申来候、恐悦之御事ニ候、依之両殿様へ為御悦明朔日麻上下着独礼已上登　城可有之候、小役人者支配頭へ可罷出候、右之趣、此跡略ス

　　　　　　七月廿九日　　　　　　　　　　藤堂采女

　　大　　　　　　　　　　神尾

　　　八月　々番一色　触番森川・大平

　　　　　　　　　　　　　〃〃　〃〃

二百十日

一、癸丑八朔御礼登　城、采女殿御出座、御帳前長島・西山、采女殿取次近藤十郎右衛門

△昨日御触ニ付御玄関入替り相待直ニ恐悦申上候、取次近藤七郎右衛門

一、三日御触来ル、左之通

　　　殿様来月十六日長野越爰許江

　　　御越国可被遊候旨被　仰出候

　　一、御入国之節御家中不残御迎之儀袴羽織ニ而下馬御門下芝之手ニ並居

　　　御目見可有之候、諸役人者例之場所ニ而

　　　御目見へ可被致候、不及申候得共

　　　御通之節家来共　御目通ニ居不申候様可被申付候、普請奉行共罷出諸事致差図候様申付候

　　一、病気差合之面々急名代不相成候、右不参之面々者組合限　御着坐前書付を以普請奉行へ相断可被申候

　　　右之趣─　　　八月二日　　　藤堂采女

△智覚院殿寛文九酉年六月十八日之御死者当亥年ニ而百四拾七年ニ相成候事

一、五日与頭桑名へ指出ス、口上書左之通

　　　　　　口上

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　私儀

　　　一昨年春家督結構ニ拝領仕難有仕合ニ奉存候、　御越国之節大小姓加り被為　仰付相勤申候、家督已来為差御奉公茂不奉申上恐多奉存候、何卒江戸詰并御道中限御供其外御使者等不依何相応之勤筋被為　仰付被為下候ハヽ難有仕合ニ奉存候、毎度御歎申上候茂奉恐入候得共、此段宜様御執成被仰上可被下候奉願候事

　　　　　亥

　　　　　　八月　　　　　　　　　　稲葉小左衛門

　右之通相認上包無持参桑名ニ謁如是相認致持参候、右ハ全采女殿へ御差出被下候義ニ者無之、御自分様御心覚へ之為相認候迄ニ御坐候、右之趣意可然御演説被下候様相頼候事

一、七日浪人かくまい之御触来ル、与頭中添翰ニ而有無之儀来ル十二日迄ニ又右衛門方へ手紙ニ申遣候様申来ル事

一、十一日又右衛門入来被申聞候者、此間被仰聞候御口上書ヲ以致演説候処、御承知被成御含置可被成旨被仰聞候旨被申聞候事

△同夕同所江手紙遣ス、左之通与頭中連名

　　　以手紙得貴意候、私方ニかくまひ置候浪人無御坐候、此段可然様奉頼候、已上

　　　　　　八月十二日

一、廿七日晩水沼先生へ書帖出ス、左之通

　　一、曽我氏義当秋　御越国之砌ゟ講釈被　仰出候様仕度奉存候、栗本引請之節茂御越国之度々被　仰付候事ニ御坐候、最早五助引請ニ相成候而九年ニ及かと覚居申

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　一入

候、右之通ニ相成候得ハ御門下一統励ニ相成可申候と奉存候、呉々も宜様奉頼上候、栗本之咄も御坐候事故右之趣申上候、且左之義ハ

御初入之砌ゟ申上候、脇阪義ハ元来御家中子供素読ニ被　仰付在之候得共、是も近年講釈被　仰付候、御流儀計無之候而ハ他門江之聞へも不宜、御門下之気請重可宜哉と相考候事ニ御坐候、御勘考可然被仰込可被下候、尤采女殿江御口上書御差出可被下候、無左而ハ爰元之振合不宜候、右御口上書私共へ向被遣被下候ハヽ右ヲ以私共茂御同様口上ニ而相願申度奉存候、右之段急々申上候、草々貴答被下候様仕度奉存候、此跡略ス

　　　八月廿七日　　藤堂彦兵衛　稲葉小左衛門

　右相認問屋へ出ス

　　　九月　小月　番一色　触番箕浦

一、癸未朔日佳節ニ付御礼御用捨

一、三日水沼先生ゟ返書来ル、手覚も来ル、左之通

　　一、曽我家事当秋　御越国之砌ゟ講釈被　仰付候様願候様被仰下、先年栗本引請之節茂　御越国之度々被　仰出相勤候様五助引請ニ被　仰付年数も余程相立候事故申立候様右之通ニ相成候へハ、御地御一統之励ニ茂相成候様思召候ニ付、委細被仰下候趣承知仕候、少子義も　御越国中講釈申上候様仕度兼而存念ニ罷有候儀ニ御坐候故、早速昨晦日登　城仕猪之助殿へ右之通被　仰付被下候へハ、一統之励ニも何卒講釈申上候様被　仰付候様申述候儀ニ御坐候、右ニ付爰元ニ而願候趣意御地采女殿江茂願候様、無左而ハ御地之御振合も不宜候付、手覚差出候様、尤右手覚貴公様へ向上候様、左候へハ右手覚貴公様ゟ御地御役所へ御差出、貴公様ゟも同様御口上ニ而御願被成候由、委細承知仕候、則爰元ニ而差出候通相認上候間、乍御世話何分可然様御頼申上候、爰元猪之介殿御請込之様子至極宜御坐候、何卒此度被　仰付候様仕度奉存候、脇阪山中も有之候事故曽我も此度可被　仰付と奉存候、此儀自是御頼御相談可申上と存候所、御心付被仰下忝、猶呉々も御地御取計宜御頼申上候、先者用答迄申上度如此御坐候、恐惶謹言

　　　　　　九月朔日　　　　　　　　水沼久大夫

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　通祐（花押）

　　　　　　　藤堂彦兵衛様　稲葉小左門様

　　　　　　口上之覚

　　一、　　　　　　　　　　　　　　　　　曽我五助義

　　　流儀引請世話役被　仰付候已後弥出情仕候間、当秋　御越国中於

　　　御前兵書講釈申上候様被　仰付被下候様仕度奉存候、先年

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　栗本八郎右衛門

　　　引請世話役中　御越国度講釈申上候例も御坐候間、御願申上候、右之通被　仰付被下候得ハ難有仕合ニ奉存候、此段宜様奉願上候事

　　　　　亥九月朔日　　　　　　　　　水沼久大夫

一、四日右手覚小左衛門持参登　城、筆頭源之進呼出し久大夫ゟ差上候様申越候、尚私共も同様御願申上候段申述引取候事

一、五日水沼先生ゟ爰元者御聞届相済候、追付采女殿ゟ御達可在之と内々申来ル事

一、重陽御礼登　城、采女殿御出席

△祥之助初而　御目見願之通相済、依之明後十一日采女殿御逢可被下旨与頭ゟ申来、御礼登　城不及候事

△御仏参之節御寺へ肩衣預ケ不申候様通達来ル、文言略ス

一、十一日朝五時過登　城、祥之助麻上下、此方平服、与頭又右衛門同伴、四半頃御逢御挨拶有之、御請申上候、但四時御逢と申来候事、直ニ御玄関ニ而御礼申述ル、与頭月番へ挨拶ニ参ル

△神尾六郎右衛門　御越国中与頭加役被　仰付候段与頭ゟ為知廻帖来ル

△御右筆方ゟ手紙来ル、左之通

　　　以手紙得御意候、先頃御差出被成候水沼久大夫ゟ曽我

　　　　　　　　　於　御前

五助　御越中兵書講釈申上候様仕度旨願之趣達

　　　　　　　　　　　　　　　　　〃〃〃

　　　御聞願之趣　御聞届相済候、五助今十一日御達御坐候間、此段可申進旨

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　久大夫へ

　　　宜被仰遣候様采女殿被仰聞候ニ付、得御意度如是御坐候、已上

　　　　　　九月十一日　　　　　　　　御役所

　　　　　　稲葉小左衛門様　　　　　　　御右筆共

　　　二白、御世話人衆御連名ニ而可得御意筈ニ御坐候へ共、貴様ゟ久大夫手覚書御差出之事故御一名ニ而得御意候、以上

△右及相答追付登　城、於私共難有御礼帳前ニ而申述ル、小左衛門壱人ニ而為相済候事

△右之趣先生方へ彦兵衛・此方両名ニ而申遣ス、尤御右筆方へ采女殿江之御礼御帖被遣候様申遣ス、文言略ス

一、十五日朝五時采女殿へ平松へ罷越候御案内申上支度為相済堅五郎方へ寄合四時過より発足、平田ニ而支度、観音寺坊主茶屋ニて休足、柿出ス、茶代二百文遣ス、石蔵取かへ、七半頃平松宿へ着泊り、米屋石蔵堅五郎

　　　　九郎右衛門代り

此方貞二郎四人相宿、夕支度仕廻四人申合連中へ見舞ニ参、孰茂番頭宿米屋へ来り御供割振り鬮、刀番加役金右衛門、御左御簾山田直四郎、山田ゟ友田此方左りヒラキ相勤ル、酒宴在之、暁六時過ゟ元町へ御迎ニ罷出ル、はたこ上下共壱人前百五十銅ツヽ、外ニ二百文茶代遣ス、酒肴代ハ別御払、元町休ニ而柿出ス、茶代二百文遣ス、元町休茶屋前ニ而　御目見へ申上ル、御

　　　　　　　山岡少三郎加役

迎御大小姓共と刀番披露、平松　御着四時過